

No.161

2009.
11.30

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

「全国豊かな海づくり大会」に思う

岐阜県博物館協会 会長 若宮 多門



平成二十二年六月第三十回「全国豊かな海づくり大会」が岐阜県にて開催されます。海を持たない内陸県での初の大会です。

山→森→山里→平野→
海そしてまた山へと大いなる

水の循環が生命を育み私達もその一員として生かされて来ました。すでに山や森の状態が海に多大な影響をおよぼすのは周知のことであり、「豊かな海づくり」とは「豊かな山づくり」であり「森づくり」とも言えます。

古代中国の四千年の昔、神話の時代より、よく水を治めよく水を利する者こそがその国の王になったと言われます。草も木も虫や鳥たちも、生物あるいは生命体と言われるモノでその要素に水を含まないモノは何一つありません。水イコール生命であり水とは命そのモノです。人間は水辺に集いよく水を治め、よく水を利して、更には多くの生物たちの命も頂戴しながら生の営みを繰り返して来ました。河川に沿って世界の偉大な文明は発生し、象徴としてその河川名をその文明に冠するほどです。

水の源に神は住む。古来濃尾の平野を潤おす豊かな水の流れは、清流長良川をはじめ北方より流れ下ります。川は水の恵を運ぶとともにひど度氾濫すれば洪水は何もかも奪い去ってしまいます。人々は感謝と畏敬の念に北天を仰ぎ見ると、そこに白き神々の座—白山—が望まれます。やがてそれぞれの集落において、その地の護りとして、また予祝の場として白山の神が祀られることとなります。

水分の神(水を分け与える神)—白山の水は、

岐阜県愛知県においては長良川により美濃の平野を潤し伊勢湾へ運ばれ、福井県においては九頭竜川が越前の平野を潤し日本海へ、石川県においては手取川が加賀の平野を潤し同じく日本海へ、そして富山県では庄川の流れが砺波の平野を潤し富山湾へと、まさに白山こそが日本第一の水分神といえましょう。白山はまたこの様に農業、漁業を司るのみならず遠望出来ることにより山当の航海の神としても広く信仰を集め日本全国に白山神社が創建されました。一方仏教の伝来とともにもたらされた神仙思想や修験道により神と仏は習合し山岳登拝が盛んとなり、殊に白山は白のもつ意(無・生出・再生など)により新しき力のさずかる山、よみがえりの山として多くの人々を白山山頂へと誘いました。白山の南正面においては尾張春日井の白山第一の鳥居を出発点に美濃洲原・郡上長滝そして石徹白を通る美濃馬場参詣登拝路が開かれ大いににぎわいます。

現在岐阜県には五百二十五社の白山神社が鎮座します。その数全国一です。たとえ「加賀白山」また「越のしら山」と称えられようと最も多く白山神を祀り最も深く白山を信仰したのでは飛驒の国、美濃の国の人々です。古来、神の前庭、市場よりあらゆる文化が発生したといわれます。この地、岐阜県の歴史・文化を学ぶには、まず第一に白山文化をひも解かねばならないでしょう。

岐阜県博物館協会地域活性化委員会では来る平成二十二年度地域活性化事業のメインテーマとしてこの「水」に深く係わる白山文化の研究と決めさせていただきました事をご報告し、私の巻頭の言とさせていただきます。

平成21年度 東海地区博物館連絡協議会「日本博物館協会東海支部総会に出席して」

期 日：平成21年7月24日(金)

会 場：山梨県立博物館

参 加：静岡、愛知、山梨、神奈川、岐阜の5県から50名
(本県からは7名)

東海地区博物館連絡協議会の会場となったのは山梨県立博物館。山梨県立博物館は、2005年に開館し、愛称は甲斐とミュージアムをかけた「かいじあむ」である。基本テーマは「山梨の自然と人」であり、自然系展示と歴史系展示を分けずに展示や資料の収集、調査研究活動、社会教育活動を行っている。常設展示は原始時代から現代という時系列に沿った展示であるが「水に取り組む」、「信仰の足跡」といったテーマを設定した展示になっている。

総会にあたり、平川館長よりご挨拶を頂いた。平川館長は山梨県立博物館長のみならず、国立歴史博物館の館長も兼任しており、また、歴史分野の第一人者でもある。続いて、日本博物館協会 田村専務理事と山梨県教育委員会 松土教育長に御祝辞を頂いた。



議題としては、平成20年度事業報告、平成21年度監事選任、平成21年度事業計画並びに予算案、さらに平成22年度開催県が採択され、平成22年度は、神奈川県で行われる予定である。

総会后、記念講演会が行われた。「甲斐金山と鉱山技術～甲斐金山研究の最前線～」と題し、甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷口一夫様より熱意あふれる講演を頂いた。講演内容は、次の通りである。

「遠く中世・戦国時代に栄えた湯之奥金山遺跡は、甲斐国境の毛無山の中腹に位置し、早くからその存在が知られ学術的解明が求められていた。中山・内山・茅小屋の3金山を総称して呼ばれる「湯之奥金山」は、古くから「信玄の隠し



金山」として伝承の中で町民に親しまれてきた所。その中心が中山金山になる。湯之奥金山遺跡は、下部町時代、昭和63年度に始まった「ふるさと創生事業」の一環として、地方が自ら考えて自ら行うという基本理念により、平成元年に調査団と調査会を組織、以後三箇年にわたって総合学術調査が実施され、考古学・文献史学・民俗学・鉱山技術史・地質学等々からなる学際的総合調査が進められるに従い、その実態が明らかになった。また、日本列島の各金銀山遺跡との比較研究を進める中で、この湯之奥金山遺跡が、我が国の金山採掘の金山経営の初源的形態を保っていることも明らかとなり、歴史的、学術的にも価値が高いことが証明された。……………」



総会終了後、山梨県立博物館の常設展、企画展の観覧、また、その後、懇親会が行われ親しく親睦を深めた。美術館、博物館はお互いに情報交換や作品交換等を積極的に行うことが大切であり、また、このような博物館関係の会議にできる限り、参加させて頂くことが重要と思われた。

(機関紙委員 光記念館 吉井隆雄)

第118回岐阜県博物館協会公開講座報告 「みんなで講評会」

期 日：平成21年9月13日(日) 14:00～
会 場：三甲美術館
講 師：熊崎勝利氏(加藤栄三・東一記念美術館館長)
長谷川喜久氏(日展会員)

三甲美術館では、毎年9月に「なつのおもいで」絵画展を開催しています。この絵画展は、岐阜市及び近郊在住の小学生を対象に、夏休みの思い出を描いた絵画を募集して、すべての応募作品を審査し館内に展示するものです。今回は273点が出品されました。

また、展示期間中の9月13日(日)に、上位入賞者を中心に希望者とそのご家族を対象とした講座「みんなで講評会」を行いました。審査をして頂いた加藤栄三・東一記念美術館館長の熊崎勝利氏と日展会員の長谷川喜久氏を講師に迎え、スクリーンに映した参加者の作品の画像を見ながら講評を頂きました。とても和やかな雰囲気が進められ、講師のお二人は作者である子どもたちに何をどんな気持ちで描いたかなどの質問をしながら、作品のよいポイントなどそれぞれの視点で細かく話してくださいました。



一緒に参加して頂いた保護者の方々には「『こうじゃないでしょ。』と大人の視線で決めつけしないで、子どもの発想で自由に描かせて欲しい」と話されました。興味深い話ばかりで、参加者のみなさんはとても熱心に聞き入っていました。絵のプロである講師のお二人に自分の絵を認めてもらったことは、子どもたちにとって貴重な体験になったと思います。弊館は、この絵画展に参加した子どもたちがこれからも楽しく絵を描いてくれることを祈念しています。

(三甲美術館 学芸員 高橋怜子)

第119回岐阜県博物館協会公開講座報告 「堀木エリ子ギャラリートーク」

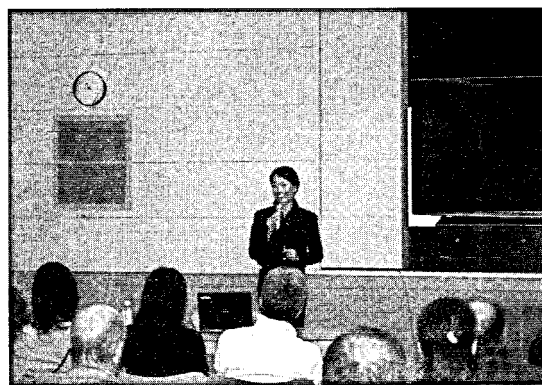
期 日：平成21年10月11日(日) 11:00～、14:00～
会 場：美濃和紙の里会館
講 師：堀木エリ子氏 参加者100名



和紙とあかり展

美濃和紙の里会館開館15周年記念事業として、和紙クリエイターの堀木エリ子氏のプロデュースによる「和紙とあかり展」を開催しました。

これは、美濃和紙あかりアート展の優秀作品と、自らの作品を融合させて、展示空間を作り出し、高い技術によって生み出された和紙の魅力を存分に引き出された展示となりました。



ギャラリートーク

本展の関連事業として、堀木氏によるギャラリートークを開催しました。

燃える、汚れる、破れる、退色する、精度がないなどの和紙の難点を克服しながら和紙に向き合ってきた自身の経験から「和紙の持っている可能性について」「和紙を通したモノづくりへの思い」を語っていただきました。堀木氏ならではの和紙の魅力や可能性へのアプローチ方法などを学び、素晴らしい講演を開くことができました。

(美濃和紙の里会館 村井和仁)

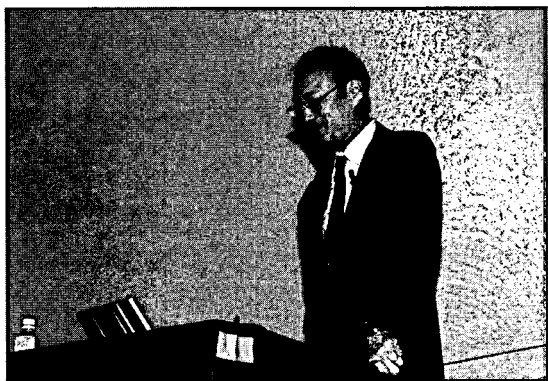
平成20年度 地域博物館等活性化支援事業報告

岐阜市科学館では、岐阜地区における地域博物館等活性化支援事業として、平成20年10月5日に天文講演会を実施しました。

当館は、郷土の自然・科学技術などの常設展示とプラネタリウム、天文台を備えた総合科学館で、岐阜県では第1号の登録博物館です。常設展示のほか、特別展や各種教室活動などの教育普及事業を行っており、年間10万人前後の方に利用していただいております。

このような教育普及の一環として、今回の地域博物館等活性化支援事業を利用して、天文講演会を実施しました。講師は、国立天文台准教授の渡部潤一氏で、氏は太陽系の天体を専門に研究され、マスメディア等により積極的に天文の広報活動を展開されておられます。また、先ごろ話題となった冥王星の分類についての世界会議では、日本代表として参加するなど、日本の天文学者としては最も名前の通った方といえます。

当日は、プラネタリウムドーム内で「新しい太陽系の姿」を演題に講演会を実施し、91名の参加者がありました。観測技術の進歩により惑星が発見されてきた事情や、コンピュータグラフィックスによる惑星誕生、冥王星が惑星から準惑星へと分類が変わった経緯など、ユーモアを交えながらのわかりやすい講演で、天文学の最前線の話題を聞くことによって宇宙像をより身近なものとしてとらえることができ、有意義な講演会となりました。



渡部潤一氏講演会

(機関紙委員 岐阜市科学館 小森龍二)

岐阜県博物館協会 県民文化講演会

演 題：「博物館のこれから」
～鳥羽水族館のあゆみと目指すもの～
期 日：平成21年5月29日
会 場：岐阜県博物館 ハイビジョンホール
講 師：鳥羽水族館名誉館長 中村幸昭氏
参加者：約100名

鳥羽水族館の創設者であり、現在は名誉館長を務める中村幸昭氏による講演会が開催されました。

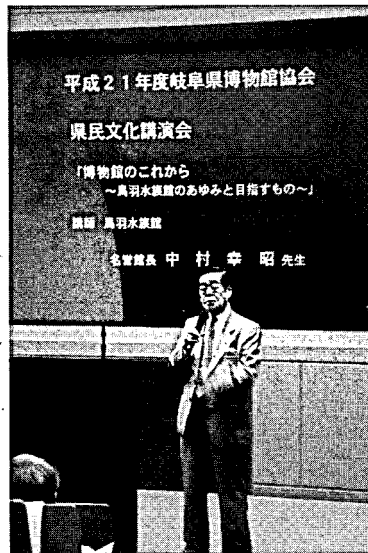
鳥羽水族館では、「人の真似をしない」をコンセプトに、日本ではなく世界初を目指した運営をしている。中村氏は、ご自身の生い立ちから、

新聞記者時代を経て鳥羽水族館を設立し、世界有数の水族館に至るまでの豊富な実経験より、ユーモアあふれる話をしてくださいました。

博物館とは、多くの人々に隔てなく広い知識を知らしめるための施設であり、それが文化の継承に繋がる。現在の博物館は、その内容が問われており、いかに教育活動=博物館活動をしているかが大事で、博物館活動には、まず創造性、2番目に学習性（生涯学習）、3番目には発想の転換、そして4番目には話題性が必要であると説かれました。また、館の運営は、1館だけで行っても限界があり、他館との共同企画や情報交換、交流が必要で、東海3県の博物館の連携・交流の必要性がある。さらに、岐阜県の博物館は、岐阜県ならではの博物館活動を展開すべきであるとも述べられました。

また、学芸員の心得として、ハングリー精神と分野を超えた幅広い人間関係、好奇心の重要性についても語りました。

ジョークを交えた、流れるような中村名誉館長の話術に引き込まれ、あっという間に時が過ぎ去った講演会でした。



(機関紙委員 岐阜県博物館 志水順子)